慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ブータン東部におけるツーリズム導入に関する一考察： メラとサクテンの事例から
Sub Title	Tourism development in the eastern Bhutan: a case study in Merak and Sakteng
Author	脇田, 道子(Wakita, Michiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010.) ,p.31- 53
JaLC DOI	
Abstract	The door of the Himalayan Kingdom of Bhutan for tourists was opened in 1974. Bhutan's tourism has been developed prosperously with the fixed tour tariff under their unique policy of 'high yield and low volume.' This core component of the policy is to ensure a sustainable environmental and cultural carrying capacity in the small Himalayan country. Tourism has emerged as one of Bhutan's leading industries in recent years but the benefit has been remained only for the western part of Bhutan. Now for the economical development of eastern and southern Bhutan, the government is planning to promote tourism in these regions. Merak and Sakteng, located in the easternmost part of Bhutan, the remote settlements of Brokpas, a distinct ethnic group of seminomadic people as prime tourist destinations which could help increase the number of repeat visitors to the country and create a new trekking product featuring the ethnic diversity of Bhutan. The government is planning to introduce "carefully" the Community Based Tourism to the region soon. This paper aims to reconsider the reason why this region is focused in tourism context and indicate the problems. In addition, I will try to consider the socio-cultural change of Brokpas which towards transition and might be appeared through the tourism in future.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ブータン東部におけるツーリズム導入に関する一考察

——メラとサクテンの事例から

Tourism Development in the Eastern Bhutan

—A Case Study in Merak and Sakteng—

脇　田　道　子*

Michiko Wakita

The door of the Himalayan Kingdom of Bhutan for tourists was opened in 1974. Bhutan's tourism has been developed prosperously with the fixed tour tariff under their unique policy of 'high yield and low volume.' This core component of the policy is to ensure a sustainable environmental and cultural carrying capacity in the small Himalayan country.

Tourism has emerged as one of Bhutan's leading industries in recent years but the benefit has been remained only for the western part of Bhutan. Now for the economical development of eastern and southern Bhutan, the government is planning to promote tourism in these regions. Merak and Sakteng, located in the easternmost part of Bhutan, the remote settlements of Brokpas, a distinct ethnic group of semi-nomadic people as prime tourist destinations which could help increase the number of repeat visitors to the country and create a new trekking product featuring the ethnic diversity of Bhutan. The government is planning to introduce "carefully" the Community Based Tourism to the region soon.

This paper aims to reconsider the reason why this region is focused in tourism context and indicate the problems. In addition, I will try to consider the socio-cultural change of Brokpas which towards transition and might be appeared through the tourism in future.

1. はじめに

ブータン王国が長い鎖国状態に終止符をうち，正式に外国人ツーリストを受け入れたのは，1974年のことである[1)]。当時，西ベンガル州からブータンへの玄関口であった国境の町プンツォリンを経て首都に向かう舗装道路は完成していたが，国内の東西を結ぶ幹線道路は未整備であった。

その後，道路の整備，航空路の開設によって，1974年に274人だったツーリストの数は，2008年には27,636人[2)]（前年比31％増）へと34年間で100倍に増えた。次章で詳しく述べるが，ブータンのツーリ

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（文化人類学）

ズムは1991年の旅行会社の民営化以来，政府が費用を定め，その中から政府が一定のロイヤリティを徴収するという形式が取られている。例えば，2003年から2004年に政府が得たツーリストからのロイヤリティは，国の歳入の2.97％にすぎないが，これは水力発電からの37.35％に次いで2番目の数字である［DoT 2005: 102］。旅費が米国ドルで支払われ，貴重な外貨収入源であることはいうまでもない。それゆえ，ブータンが目指す経済発展には観光は欠かせない要因となっている。本稿は，観光で多くの外貨収入を得てきたブータンが，大きな転換期にある状況を，特に東ブータンに焦点を当てて考察する。

ブータンの観光の特徴は，ツーリストが訪れる地域が首都周辺を含む西ブータンに偏在し，東ブータンの主要な町を結ぶ幹線道路以外は整備が遅れていることである。特に東ブータンは，遠隔地であること，ホテルが不足していること，通年を通してツーリストを惹きつける観光資源に乏しいことなどの理由から長い間そのブームの波に乗れずにきた。そこで，これまで一般のツーリストの入域を許可しなかったタシガン県のメラ，サクテンの二つの谷に白羽の矢が立った。いずれも人口2,000人前後の小さな村で，住民は牧畜民を意味するブロクパ（*Brokpa*）と呼ばれ，独特な民族衣装を身に着けていることで知られている。2009年5月に一度，開放されるというニュース[3]が発表されたが，しばらくして「ケース・バイ・ケース」で許可を出すという条件付き開放に変更された。同年9月にブータン政府観光局[4]（Tourism Council of Bhutan: TCBと略される）で取材した時には，この件はペンディングとの立場をとっていた[5]。環境に優しく，かつ地元の人びとへの利益導入を目的としたエコ・ツーリズムやコミュニティ・ベイスト・ツーリズムを目指し，その準備をしていることがその理由であるという。そして，約1年たって，2010年9月1日からの解禁が再び発表された。

観光局によれば，これは地元の人々も強く望んだ結果であるというが，実際には，ツーリズム導入の計画は住民サイドからではなく，新規のルートを求めるツーリズム政策によって考えられたものである[6]。

ツーリストの来訪を現金収入の道ができるなどの理由で歓迎する声がある一方で，首都にあるツアーオペレーター[7]や地元の一部の人びとが利益を得るだけで，一般の地元民が受益者となる可能性を疑う声，「伝統的な生活」が脅かされ，悪影響のほうが多いと危惧する声もある。しかし，これらの反対意見の中には，異質に映る自らの生活文化がツーリズムの導入によって「珍奇なもの」あるいは「後進性の象徴」として他者からレッテルを貼られ固定化されてゆくことへの懸念が潜んでいる。

メラ，サクテンの観光化は，文化の資源化の典型的事例であり，森山[8]の議論を踏まえるならば，ブロクパという集団の「文化資源」を〈政府観光局や観光業者〉という主体が，〈潜在的なツーリスト〉を目がけて「資源化」するという関係性で説明される。しかし，その「文化資源」は，ブータンの多様な民族性のひとつとして「国民文化」の中に組み込むには，あまりに複雑である。国民一般にほとんど未知の地域で，入域制限があったために研究事例[9]は少ない。ツーリストは首都などの民族舞踏団が見せる観光化されたブロクパの歌や踊りを鑑賞し，東ブータンの市街地へ所用のため下りてきた珍しい民族衣装を着た人びとを写真に撮るというぐらいの接触しかなかった。

筆者は，2006年，2007年，2008年の3回，特別入域許可を得てサクテン，メラに滞在したが，長期の滞在は認められず，通算の滞在期間は2カ月半ほどにすぎない。しかし，2008年に観光局のスタッフが調査のためにメラに滞在していた時に居合わせ，ツーリズム解禁の計画があることを知って以来，特別な関心を持ってこの計画を見守ってきた。サクテン，メラの訪問は3回であるが，メラでの滞在の方が長かったため，本稿の事例は，主にメラを中心にしている。ブータンへは1976年からほぼ毎年訪れ，

ブータン地図

34年間のツーリズムの変化を目にしてきた。

本稿の目的は，サクテンやメラへのツーリズムの導入が地域社会に与える影響を良いか，悪いかという二分法でとらえること[10]を目的とはしない。導入はすでに決定し，今後は試行錯誤しながらもこの地域の観光化は進んでゆく。

本稿では，まず，なぜこのサクテン，メラが注目を浴びているのかをブータンのツーリズム全体を概観した上で再考し，その政策上の問題点を指摘する。この地域は，現在，閉鎖された伝統的な生活からグローバル化に向かう変革期を迎えており，ツーリズム導入もそのひとつであるが，この過程を通して，おそらくは再定義が予想されるブロクパの文化，社会の変化の行方についても論じる。

2.　ブータンのツーリズム戦略

東ブータンについて論じる前に，ブータンのツーリズム政策を概観し，メラ，サクテンにツーリズムを導入するにいたった経緯を検証する。

2.1　航空機がもたらした「独立」と通信手段の改善

ブータンが外国人ツーリストの受け入れを国会で決議したのは1971年で，1974年に国営の観光局Department of Tourism（DoTと略す）が組織され，第4代国王の戴冠式の後，初年度は274人の外国人ツーリストがブータンを訪問した［DoT 2005: 15］。戴冠式の際の国賓用のホテルは，ツーリストの来訪も見越して建てられたものであった[11]。国賓の接待には，事前に厳しいトレーニングを受けたスタッフが当たっていたが，その何人かが，戴冠式後の公募に応じて，観光局に入局した。ツーリズムへの胎動は，戴冠式に先立つ3年間の準備期間に始まっていた。

1974年当時，周辺のインドやネパールへの団体旅行の1泊当たりの現地費用は1人50米ドル前後であったにもかかわらず，ブータンは130米ドル[12]で，6人以上のグループでなければ入国ビザを申請することができなかった。この6人という数字はブータン政府が決めたものではなく，インド政府が定めたインナーライン[13]・パーミット（国境地域通過許可書）を取得するための条件であった。インドと陸続きのブータンへの入国にはこの許可書が必須であったが，その取得には2~3ヵ月かかっていた。

それを一気に解決し，ツーリズムにとって画期的となったのが，航空路の開設である。1983年にパロに国際空港が完成し，国営ドゥック航空の18人乗りのドニエル機がカルカッタとパロを結ぶようになり，空路で入国する外国人にはインナーライン・パーミットの取得義務はない。今枝が，「ある意味では飛行機がブータンにひとつの“独立”をもたらした事になる」［今枝 1994: 105］と述べているように，独立国家とはいえ，外国との出入り口をインドに押さえられていたブータンを屈辱的ともいえるインナーライン・パーミットから解放し，文字通り飛行機によって国際社会へと羽ばたいたのである。

その後，1988年にドゥック航空が旧機に代えて，72人乗りのBAE146 100機を購入，コルコタ，バンコク，ダッカに就航し，翌年1989年には二機目がデリーとカトマンドゥに就航した。1974年以来1泊130ドルだった旅費が200ドルに引き上げられたのもこの年である。

1991年にそれまで国営だった旅行会社が民営化され，政府機関であるTourism Authority of Bhutan（TAB）の認可を受けた民間のツアーオペレーターが，政府が決定した公定料金の中から一定のロイヤリティを政府に支払うという方法が採用され，現在に至っている。

2004年，ドゥック航空が旧機に代え二機のエアバスを導入し，それまで天候に大きく左右されていた欠航などの運航上のトラブルは大幅に改善された。ツーリストの数は，2001年9月の同時多発テロの影響により2001年から2003年にかけて落ち込んだが，それ以降は毎年増加し続け，2008年には5代国王戴冠式や王制100周年祝賀式典などの大きな国家行事がありツーリスト数は過去最高の伸びを見せた。

通信手段の改善もツーリズムの隆盛には欠かせない要素である。ブータンと海外を結ぶ通信手段は，世界的な技術発展とともに大きく改善した。1976年当時，ブータンとの連絡手段はインド経由の郵便と電報に限られていた。その後，テレックス，電話，ファックスと時代とともに改善され，1999年からはインターネットが解禁となり，電子メールが瞬く間に普及したが，その恩恵を一番甘受しているのは，ツアーオペレーターであろう。2004年にブータンを訪問した際に，筆者は日本からレンタル衛星携帯電話を携行したが，山道では電波障害が多く，あまり役にはたたなかった。しかし，現在では，地方の農村でも農作業中の農民が携帯電話で話をしている姿を見かけるほどの普及ぶりである。

1974年，欧米のマスコミは「最後のシャングリラのドアが開いた」と報道したが[14]，シャングリラというイメージは現在も初めて訪れる多くのツーリストが抱く印象であろう。航空機で空の玄関口でもある国内唯一のパロ空港に降り立つ人びとを迎えるのは，重厚な伝統的木造建築のターミナルビルと民族衣装を着た空港職員である。周囲は緑の山々に囲まれ，滑走路の北西には17世紀に建てられた城（ゾン）がそびえ，その周りの農家も版築工法の白壁と木造部分に彩色が施されたブータン西部の典型的な二階建て，三階建ての建築である。しかし，この「シャングリラ」イメージは，航空機が毎日飛ぶようになり，ブータンの経済発展の中で，しだいに変化しつつある。76年当時パロに1軒しかなかったホテルは，2010年6月現在，大小合わせて63軒あり，過当競争が問題化している[15]。

2.2　開発政策とツーリズム

ブータンのツーリズム振興政策は，そのスタートが国営旅行会社であったことからも，国家全体の開発計画の中に位置づけられるといえる。その開発計画は1961年の第1次5ヵ年計画に始まるが，上田は開発開始説の共通点として，「当時の対外的，そして内政的変化が第3代国王と重臣の一部に国家の主権と独立を守るためには開発を行う必要があると確信させたということになろう」［上田 2006: 112］とまとめている。

チベットでは1950年から51年にかけて中国の侵攻を受け，1959年にはダライ・ラマ14世がインドへ亡命したが，これは国境を接するブータンにとっても脅威であった。1961年，ブータンは経済発展を援助するという中国の申し出を断って，代わりにインドの申し出を受け入れたのである［Coelho 1970: 78］。その後，ブータンは1962年にコロンボ計画に参加し，1971年には国連に加盟して事実上の国際デビューを果たすことになった。

ブータンのこれまでの開発政策を分析した上田は，「ブータン政府は，伝統文化に誇りを持ち，伝統文化を後進性と結びつけていない点で近代化推進者ではない。しかし同時に近代化を進めその肯定的な面も認識している点で，頑固な伝統文化の保護者でもない」とし，「政府は，ブータンに元々備わっているものを利用した国家の近代化を目指している」［上田2006: 150］と結論づけている。

ツーリズムもこの元々備わっているものを利用してスタートしたが，同時にその保護には神経をとがらせてきた。1970年代から80年代にかけて，世界で希少といわれる蝶[16]や多彩なランを採集するツアーが日本も含む世界各地から大挙して訪れたことがあった。しかし，間もなく動植物の採集持ち出し禁止の布令が出され，現在も続いている。1983年に一度解禁になった登山も，1994年には6000m峰以上の登山が禁止され，2004年からは全面的に禁止となった。ブータンの人びとにとって，山は信仰の対象で神聖なものであるという理由であったが，ネパールのシェルパや山岳ポーターのような職業がないブータンでは，村人がアルバイトで荷運びの手伝いをすることになるが，登山シーズンは田植えや収穫の時期と重なることもあって，農家の貴重な人手を長期間割かれるのであまり歓迎されていなかった。また，荷運び用の馬やヤクなども貴重な家畜であることから，有償とはいえ，長期間登山隊に提供することには村人の抵抗もあった。このような状況を知った王家からも強い抗議が出され，現在も禁止の状態が続いている。ただし，頂上を目指さない短期間ですむトレッキングは，いくつものコースがあり，逆に奨励されている。

1970年代には，ツーリストが，寺院の中で仏像や壁画の写真撮影をすることにはほとんど規制がなかった。行政府と僧院とが同居する伝統的なゾン（城）の中の見学もほぼ一日中許された。1987年にはツーリスト数は2,524人と80年代から90年までのピークを迎えることになった。しかし，ツーリストの増加に伴って，不敬な行為が宗教活動の妨げになるという理由から，1988年には宗教局が寺院内への立ち入りを禁止し，1989年には，ツーリストの数は1,480人にまで落ち込んだ[17]。しかし，国王はその数にはまったくこだわっていなかった。1990年当時，観光客の数は年間2,500人に制限されていたが，これに対する外国メディアのインタビューに対し4代国王は，次のように答えている。

> わが国は，観光客の殺到に対応できる基盤が整備されていない。観光収入は年間200万ドルにすぎないが，リンゴやオレンジの輸出では500万ドル稼いでいる。それに麻薬問題が起こるおそれもある。（規制が今ほど厳しくなかったころには）貴重な遺物が国外に密輸されたこともあった。

（ニューズウィーク日本語版　1990年11月8日号57頁）。

現在は，寺院への立ち入りは宗教局からの許可取得が義務づけられ，写真撮影は建物の外観に限られるようになっている。ゾンの中庭見学も執務に影響のない時間に限られ許可される。文化財（骨董品）の持ち出しも厳しく禁じられている。このようなツーリズムに関するさまざまな開放・規制は，状況を見ながら臨機応変に講じられてきた政策といえる。

しかし，ツーリストが来訪するシーズンが春秋に偏っていて繁忙期のサービスが低下していること，西ブータンに集中していること，プログラムが多様性に欠けていること，観光局が人材や資金不足でモニタリングやサービス向上，リサーチ，フィードバックなどを十分行えていないこと，地元のコミュニティが馬やポーターの供給以外にツーリズムに直接関われていないこと，高額な旅費を定めていても，競争に勝つために外国の旅行会社に違法な値引きするツアーオペレーターがあって，サービスの低下を招いていることなどの課題が指摘されてきた［Dorji 2001: 89–91］。この内，モニタリングやリサーチなどは観光局によって定期的にレポートが発行され大幅に改善されている以外は，現在も同様の問題が残されている。

2.3　ポリシーは今後も守られるか？

ブータンのツーリズム政策は“high value, low impact”あるいは“high value, low volume”，“high-yield, low impact”を理想としていると言われてきた。つまり，高い費用を払ってくれる少人数の外国人ツーリストを対象とし，環境や文化にダメージの少ない持続可能なツーリズムを目指すものである。この政策の下に，これまで発展してきたブータンは，生物多様性のホットスポットとして，伝統文化を保持し，国民総幸福量（Gross National Happiness: GNH）[18] の増加を目指す国として高い評価を受け，ツーリズムに関してもさまざまな課題はあるものの，「ブータンのツーリズムの利益は，確実にそのデメリットを補ってなお余りある」と評価され，「彼ら（ブータン政府観光局）は正しい方向に向かって前進している」［ピーティ 2009: 182–194］と将来の保証まで得ている。他にもツーリストの数の制限に失敗したネパールの旧ムスタン王国の開発との比較からの評価が与えられている［Godde etc. 2000: 9］。しかし，このような賛美は，過去はともかく現実を反映しているとはいえない。なぜならば，現在では，ツーリストの人数制限や政府が決める公定料金といった基本的なポリシーに大きな変化が見えはじめているからである。

ブータンの場合には，自然は農民や牧畜民にとっての生活の糧を得る場であり，宗教施設である寺院や城，そしてそこで行われる祭は，たんなる歴史的建造物や見世物ではなく，実際に宗教実践の場や，役所として使われ，民族衣装，唐辛子料理，伝統建築なども人びとの日常生活の中に息づいている。こうした生活文化そのものがツーリズムの資源であることから，ツーリズムの発展は，常にその資源を保護するか，あるいは消費するかというジレンマとともにある。ブルネットらは，ブータンのツーリズム開発が「伝統とモダニティ間の緊張」の中にあり，そのジレンマは，グローバルな経済発展の仲間入りをしつつ，一方では伝統的な文化的アイデンティティを保持してゆかなければならないことにあると指摘している［Brunet etc. 2001: 244］。ブータンだけが，理想化された「最後のシャングリラ」として，伝統の中だけで生き続けることは不可能であり，政府のツーリズム政策もさまざまな葛藤の中で模索を続け，時には迷走する。

2.4　第10次5ヵ年計画にみるツーリズムへの期待と戦略

2009年9月12日付けのクエンセル・オンラインは「1年に25万人のツーリスト？」という見出しで，GNH委員会[19]と海外のコンサルタント会社が「今後3年から5年の間に年間のツーリストを25万人に増やす」と発表したことを伝えている。記事によれば，政府の第10次5カ年計画（2008–2013）の最終目標が10万人であることと，ツアーオペレーターの業者団体（Association of Bhutanese Tour Operators：略称ABTO）[20]が，米ドルでの支払いをするツーリストを毎年5万人と見込んでいることが報じられている。5万人という数は，実情と過去の実績に合ったもので，2007年は約22,000人，2008年は約28,000人であることからの試算であるという。ABTOはまた，約70万人の人口に対して25万人のツーリストという数の大きさを疑問視している。二機のドゥック航空の座席の合計は228席だが，毎日満席で365日運航したとして，83,220人であること，2008年の28,000人に対してさえ座席の確保が大変であったことを指摘している。25万人計画は，提案されたツアー料金の自由化とともに大きな議論をよんだ。

2010年1月28日付けクエンセル・オンラインには観光局長の言葉として，競争を生まない公定料金制度を見直し，旅行費用の自由化を図りたいという記事が掲載されている。自由化しても，「ハイバリュー，ローインパクト」のポリシーを守るためにホテルは三ツ星以上の使用を義務づけることも付け加えられている。この記事の中で一番驚いたのは，局長が「他のブータンと同じような国々のツーリスト密度が22％であるのに対してブータンはたった0.06％で最低である。仮にツーリストが10万人になったところで二番目に低い国はそれより55倍高い。」と述べたことである。60％の森林を保全することを憲法[21]にも明記している国が，ツーリスト密度などという数値を問題にしたことへの驚きである。これに対して，ABTOは，過去のデータから現行の料金システムでも2013年には91,793人にすることが可能であると応じている。

結局3月になって首相，観光局，ツアーオペレーターとの一日かけての協議の結果，ツアー料金の自由化は見送られ，その代わり2012年から1泊の料金をこれまでの200米ドルから250米ドルに値上げすることで決着を見たことが3月10日のクエンセル・オンラインで報じられている[22]。

自由化に反対の立場に立つ大手オペレーターの一人が個人的にジグメ・ティンレイ首相に会ってこの問題について問うた時には，若年層の雇用対策[23]のためのツーリズムに並々ならぬ期待を寄せ，理解と協力を要請されたという。2009年11月に観光局は改編され独立行政法人となったが，その責任者は首相自身であることからもその期待の大きさがうかがえる[24]。

2008年に初めての二大政党による選挙が行われ，憲法が発布され，それまでの絶対王制から立憲君主制・議会制民主主義国家へと変革を迎えた。この年から5年間の開発計画の指針である第10次5ヵ年年計画にもツーリズムへ期待と細かな戦略が示されている［Gross National Happiness Commission 2009: 106–109］。以下は，その抜粋である。

1. ツーリズムの位置づけは，雇用と外貨獲得に貢献するメジャーなサービス業である。2007年には21,094人が訪れ，2,900万ドルを稼いだ。これは国家の歳入の3本指に入り，最も伸びている。
2. 旅行産業はその規模の大小を問わず，他のビジネスへの波及効果がある。
3. トレッキングや自然観察ツアーを通して，田舎に現金収入のチャンスを与える可能性を秘めている。
4. 旅行産業がブータンのイメージとアイデンティティを世界に広める計り知れない貢献をしてい

る。ブータンが環境保護と豊かな文化遺産保護に努めていることを世界に認知させた。

5. 雇用創出は，農村など地方の貧困克服に貢献する。
6. しかし，長期の持続可能な産業を保持するために増加するツーリストが文化や自然に与えるインパクトを最小限に抑えなければならない。
7. メラ，サクテン，マナス[25] などがブータンを再訪するツーリストを呼び込める地域である。そのためには，東部のサムドゥプ・ジョンカや南部のサルパンなどの出入国ポイントの見直しが必要である。
8. 少数でも高い利益を生むツーリストは，平均以上の費用を使うが，質だけではなく，ユニークさを独占できる経験を求めている。それらを満足することにターゲットを絞ることが必要である。
9. ピークシーズンに特定の地域にツーリストが集中してしまわないよう，場所やシーズンを拡散させる努力が必要である。
10. ブータンをユニーク，エキゾチック，文化的，スポイルされていない目的地として宣伝する。
11. ローカル・コミュニティの参加とその利益のために，農村におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムを増やす。
12. 通常のツェチュ祭だけでなく，他のフェスティバルなども様々な場所で実施する。
13. 城やツェチュ祭，宗教施設，公園，川，山など自然，文化資源などへのアクセスを良くし，設備を整えるとともに，安全性，神聖さ，人の尊厳を保障するルールを作る。
14. 目標数字は，ツーリズムの国の歳入割合を9％に，ツーリストの数を2005年の13,326人から30％増加，ツーリズム関連の雇用を2004年の2,000人から40％増やす。

ブータンで現在問題となっているのは都市と地方との格差である。たとえば，第9次5ヵ年計画のGDPの実質成長率は，目標の8.2％を上回る9.6％であったが，これは主として大規模なダム建設による電力のインドへの輸出が大きく貢献したもので，農業，牧畜，林業などの成長率は目標の2.5％の約半分の1.3％という結果であった［同上：4–5］。貧困問題に関していえば，人口の23％が貧困線以下にあり，その98％が農村部であるという結果がでている［同上：25–26］。上に挙げたツーリズムへの期待もこうした貧困対策を反映したものといえる。しかしながら，数値だけで貧困度を判断するという方法は，生活の質を重視するブータンの国情には合わない。

一方，5ヵ年計画のツーリズムに関する分析，戦略で注目されるのは，7. にあるようなメラ，サクテン，マナスという地名，それらに近い入出国ポイントが挙げられているが，これ以外の具体的な地名は他にみあたらないことである。

現在まで国内航空路のないブータンでは，東ブータンのタシガン県の県庁所在地までででも首都から車で二日間を要する。インフラ整備の遅れた中央ブータン，東ブータンへの開発政策のひとつに国内航空路の開設計画がある。中央ブータンのバスパラタン（Bathpalathang）と東ブータンのヨンフラ（Yonphula），南部のゲレフ（Gelephu）に空港の建設が決まっており，早ければ2010年から2011年の2年以内には国内線が就航する見込みである。まだ民間会社に入札をさせている状態だが，滑走路の長さなどの問題から，小型のプロペラ機になる予定だという。国内線は，主に公務員の出張やツーリストの利用を見込んでいるが，ヨンフラ空港は，新しくオープンするサクテンとメラを目指すツーリストの利用を期待している。再び首都に戻る必要はなく，陸路でサムドゥプ・ジョンカからアッサムへ抜けることができるというのが「売り」になっている。しかし，アッサムの政情は完全には安定しておらず，

2007年にも治安悪化により，サムドプ・ジョンカまで行ったツアー客が再び3日かけてパロ空港まで引き返したというトラブルが起きている。東ブータンの発展は，隣国インドの国内問題に左右されるという不安定な要素があることも忘れてはならない。

ブータンに住んでいる人びとの中で，メラ，サクテンがどこにあるかを正確に答えられる人は極端に少ない。「メラサクテン」，あるいは「サクテンメラ」という一つの地名だと思っている人も多い。実際には，タシガン県（Trashigang dzongkhag）のサクテン郡（Sakteng dungkhag）にあるサクテン，メラの二つのブロック（gewog）のことで，サクテンが郡庁所在地である。サクテン郡全体は，2003年にサクテン野生生物保護区に指定されている。メラもサクテンも3,000 m以上の高地の村であるが，たがいの往来のためには4,100 mのニャクチュン・ラという峠を越えなければならず，徒歩で一日がかりの距離である。サクテンへは車道の終点であるポンメから徒歩で一日半，メラへはチャリンから一日かかる。車道の終点までは首都から車で2日半ないし3日間かかるが，ヨンフラまで国内航空便が飛べば，1日半は短縮できるだろう。そこから馬に荷物を積んで山道を登って行く。冬は雪，夏はモンスーンによる大量の雨が多くの場所でがけ崩れを起こし，村が孤立することもある。現在，途中までの車道の建設が始まっているが，険しい地形を考慮すると，村まで到達する道路建設には相当の年月を要するであろう。最近になって，携帯電話が通じはじめたが，一部の行政機関の事務所にソーラー発電があるだけで，学校にも一般の民家にも電気はまだない。しかし，これらのインフラが整備されていない村は東ブータンや北部の山岳地帯などにもまだたくさんある。そのような場所は，首都にはない素朴な「古き良き時代のブータン」の原風景をとどめている場所でもあるが，新たなツーリストを期待できるほどの魅力はない。第3章では，ツーリストを期待できると思われるメラ，サクテンとはどのような場所なのかについて概観し，第4章では，ツーリズムが誰のためのものなのかについて考察する。

3.　メラとサクテンの概観

3.1　ブロクパの言語，そして名乗り

ブータンは，人口672,425人（2006年センサス）の小国であるが，東西南北にさまざまな民族が住んでいる。van Driemの1991年の言語調査結果[26]によれば，4つの系統の19の言語が確認されている。現在英語と並んで公用語となっているゾンカ語（Dzongkha）の話者が最も多く16万人，次は，南ブータンに住むネパール系住民のネパール語（Nepali）話者が15万6千人，次が東ブータンのシャルチョップ語またはツァンラ語（Sarchop/Tshangla）話者13万8千人であるが，この3つの話者だけで統計の合計606,800人の74.8％を占めている。ブロクパは，ゾンカ語と同じ系統に属すブロクパ語（Brokpa）を話すが話者は5,000人［Driem 2001: 871］で全体の0.8％にすぎない。

言語はゾンカ語と同系統とはいえ，ゾンカ語話者にはほとんど理解できない。東ブータンのシャルチョプとはまったく系統の異なる言語であるが，交易などの往来があることから，シャルチョプ語を話せる人びとは多い。このシャルチョプ語は，アルナーチャル・プラデーシュの西カメン県に住む一部のモンパの言語でもあるが，タワン県のモンパの言語ブラーミ語（あるいはダクパ語）とは異なっている。van Driem は，ブロクパの言語は，チベット語の古語だとしているが，ブロクパには次節にあるように彼らがチベットからやってきたことをうかがわせるアマ・ジョモの伝説とよばれる伝承が残されている。

ブロクパとはゾンカ語，ブロクパ語で「牧畜民」を意味するが，ブータン内ではブロクパといえば，

サクテンやメラの人びとを指す他称である。彼ら自身も自らブロクパと名乗ることがあるが，相手が「牧畜民イコール後進の人びと」だという認識を持った態度をとって使用する場合には，ブロクパはそのまま彼らの蔑称ともなる。一般的な自称は，サクテンの人であればサクテンパ，メラの人であればメラクパである[27]。自分たちの住んでいる土地の人びとという呼称が使われている。

3.2　アマ・ジョモ伝説

文献によって細部には違いがあるが，伝説のおおまかな内容は以下のようなものである。

> チベットのソンツェン・ガンポ王（627-49）の時代[28]にチベット南部のツォナ（錯那）の地に一人の領主がいた。彼は領民に彼の城に太陽が当たるのを邪魔している岩山を削って平らにするように命じた。この理不尽な命令に従い，人々は何年もの間，奴隷のように働いたが，耐えきれなくなっていた。そこへ，一人のジョモという名の若い女性が，仲間の労働者たちに「山の乾いた頂を切り落とすよりも，男の濡れた頭を切り落としたほうがいい」と提案した。このことばに刺激されて，人々は宴会の席で，酒に酔って意識朦朧になった領主を殺した。アマ・ジョモ（Lady Jomo）と彼女の霊的な師であるラマ・ジャラッパとに導かれて，人々は食料，経典，そして家畜などを伴ってツォナから逃れた。ヤクなどの家畜を連れたチベット人の大群は，途中サクテンの北のタワンに立ち寄った。サクテンという名は，「竹の平地」という意味である。谷の入り口を竹やぶが覆っていて，そこに住もうと思ったら，まずこの竹やぶを取り除かなければならなかったからである。これに対してメラの台地は，それを除くためには火で燃やさなければならない唐檜に覆われていた。メラの文字通りの意味は「火をつける」である。人びとは，サクテンに着いたときにメラに向ったが，途中の峠を越えるのは，身体に障害のある者たちはもちろん，年寄りや子どもたちは不可能なことだった。アマ・ジョモはこれらの人々をサクテンへ帰し，そこがブロクパの最初の定住地となった。若く，元気な人々はアマ・ジョモとラマ・ジャラッパと一緒にメラへ向った［Sonam Wamgmo 1990: 141–158］。

この伝説は，祖先の移住伝説で，メラとサクテンの人びとの故地がチベットであること，途中タワンを経由してメラ，サクテンに定住した経緯を伝えている。ブロクパがかつて住んでいたとされるツォナは，現在のチベット自治区の錯那（ツォナ）県である。タワンからマクマホン・ラインを隔てたすぐ北側にある。ツォナ，タワン，そしてブータンを含むヒマラヤ山脈の南麓は，かつてはモン・ユル（Monyul）とよばれる文化圏を形成していた。現在では国境によって分断されているが，その住民の総称は，モンパであったが，ブータン側の人びとはブロクパ，中国では門隅の門巴族，インドではアルナーチャル・プラデーシュ州のモンパ（Monpa），そしてメンバ（Memba）などの民族集団の名称として限定して使われている[29]。

メラの村から遠望できるアマ・ジョモ・クンカール（女神の宮殿）とよばれる山はこのアマ・ジョモの住みかとされ，信仰の対象となっている。筆者も2008年9月に村人とともに奉献祭に参加したが，頂上は女人禁制となっていて，女性たちは直下の湖の周りで供物をささげて男性たちが山から下りてくるのを待った。山中では豚肉は食べてはいけない，喫煙も禁止，3年以内に身内を亡くした者は入山できず，村で3日以内に死者が出た場合には奉献祭そのものが中止や延期になるなど，厳しい禁忌がある。

この山だけでなく，メラの村の中，その周辺はアマ・ジョモやラマ・ジャラッパにちなむ遺跡が数多く残されている。しかし，その多くは岩や石の塊で，地元の人の説明がなければ見過ごしてしまいそうなものばかりである。

3.3　牧畜という生業と一妻多夫婚

サクテンは標高約3,000 m，人口は2,251人，戸数336戸，メラの標高は約3,500 m，人口は1,957人，戸数231戸である[30]。住民の多くは，ヤクやウシ，ヒツジを所有し牧草を求めて冬は低地へ，夏場は高地へと移動する半遊牧の生活をしている。畜産品のチーズやバターを麓の村で売ってコメや野菜，日用品を得ているが，その交易の範囲は，ブータン内だけにとどまらずインド側にも及んでいる。

10月から3月の間は，多くの住民が村を離れ，残っているのは老人所帯や家畜を持たない家族，役人の家族などである。ゴムチェン（*gomchen*）とよばれる半俗の僧は，殺生に関わることを嫌い家畜は持たないが，村のさまざまな宗教儀礼を行うことによって現金や現物を得て暮らしを立てている。

こうした半遊牧の生活の中から生まれた婚姻形態として一妻多夫婚がある。妻が2人，あるいは3人の夫を持っているケースで，ほとんどの場合，夫たちは兄弟である。一人が長期間放牧に出ている場合，残りの夫は村に残って家事などを手伝い，バターやチーズを売りに行くなど役割分担されている。家畜という財産を分散させず，かつ労働力の確保と子孫繁栄のための婚姻形態で，それを労働軽減のために女性自身も支持してきた。逆に一夫多妻のケースもある。筆者はその数を確認できていないが，クエンセル・オンライン2007月8月27日付けの記事に村びとの証言としてメラの45％の家族が一妻多夫婚あるいは一夫多妻婚だとしているが，そこまで多くはないはずである。しかし，このことが有名になって，ブロクパ女性には貞操観念が欠如しているとみなして，好奇の目が向けられるようにもなっている。若い人たちは一夫一婦制を好むようになってきている。

しかし，一方では生業を手伝わせるために一部のあるいはすべての子どもを学校にやれない家庭がある。サクテンにもメラにも小学校はあるが，上級生になるほど生徒数が減る。さらに高等教育を受けた子どもは二度と村へは戻って来ないという実情がある。ツーリストの荷運びの馬の世話は小学生ほどの子どもでも十分できる。子どもを学校に行かせるように勧める政府の指導に対し，サクテンのブロクパは「皆が学校へ行って他所へ出てしまい，自分たちが牧畜をやめてしまったらツーリストはここへきても観るものがないだろう」（クエンセル・オンライン2010年5月23日付け）と答えていた。教育と生業を守ることとは，山岳地帯のブロクパの村では両立は難しく，ましてや観光に乗り出すだけの余力はないのである。

多くの家畜を所有し，後継者にも恵まれた裕福な家庭がある一方で，後継者がいないという理由で家畜を売り払って，放牧に出かける家庭の留守番や雑用の手伝いなどで生活を支えている世帯もある。生活程度はまちまちで，すべての住民が貧困生活を送っているわけではない。電気もなく，燃料は薪，水は無料，ブータンでは医療も無料であるから，今のところは，村にいる限りは，現金はほとんどいらない生活といえる。しかし，低地に住む人々からは，森林破壊やがけ崩れの原因になるという理由で過放牧を責められ，ヤクの数を減らさなくてはならない現状があり，乳製品にしても購入者の「衛生観念」の浸透により，保存や包装に気を使わなければならない時代になっている。急速におしよせる近代化の波の中で，伝統的な生活形態との葛藤が増大しているのである。

3.4　ブロクパにとっての国境

2005年3月に東ブータンのゴム・コラで3日間にわたるツェチュ祭が開催された。毎年，数千人の人びとが参集するが，その年は，ブータン仏教の中心であるドゥックパ・カギュー派[31]の最高権威ジェー・ケンポ大僧正が法要をするとあって例年よりもさらに多くの人びとでにぎわっていた。しかし，ブロクパの姿は数えるほどしかなかった。そのかわりにインド側のアルナーチャル・プラデーシュ州のタワンから多くのモンパたちがグループでやってきていた。それがモンパだとわかるのは，女性たちの民族衣装からである。ブロクパとモンパは，同系統の生活様式をもつ人びとである。

それとは逆にブロクパがインド側へ行くこともしばしばである。たとえば，2009年11月9日，筆者の首都滞在中に，ブータン・テレビ（BBS）では東隣りのタワンをダライ・ラマ14世が訪問中であると大々的に報じていた[32]。報道によれば，法王に一目会い，祝福を受けるために国境を越えてタワンを訪れているブータン人の数は2,500人を超えたという。もし，仮に全部がブロクパだとしたら，その数はブロクパ人口の60％近い数である。筆者が知るメラの村人たちの多くも片道3日の山道を歩いてタワンに向かったという。

メラ，サクテンの人々はダライ・ラマを座主とするゲルク派を信奉してきた。現在も二つの谷のほとんどの寺院はゲルク派に属している。ブータンは，17世紀にチベット南部のドゥック派の大本山ラルン寺の座主であったンガワン・ナムゲル（1594–1651）がブータンに亡命し，デシ（摂政）を筆頭とする政教一体制が始まったが，その統一過程で内外の敵と戦わなければならなかった。チベットのダライ・ラマ5世（1617–1682）もブータンに侵略を試みたが，これは失敗に終わった［今枝 1994: 37–40］。ダライ・ラマ5世は，チベット南部のブータンも含むモン・ユル（Monyul）のゲルク派の勢力拡大のために弟子のロデ・ギャムツォをモン・ユルに派遣した。ロデ・ギャムツォはダライ・ラマ2世（1475–1543）の時代にすでにゲルク派の勢力下にあったメラに数年住んでいたため，「メラ・ラマ」の名前で親しまれている。しかし，ドゥック派の勢力により退却を余儀なくされ，結果として現在のタワンに大僧院が建てられ，モン・ユルのゲルク派および行政の中心地となった［Sarkar1981: 4–9］。ダライ・ラマ5世の転生として選ばれたダライ・ラマ6世（1683–1706）の生誕地は，タワンである[33]。

サクテンから東側の山を越えて徒歩で2日間のインド領内にルブランという村がある。この村のモンパは何世代か前にサクテンから移住してきたブロクパが中心となってできた村である。筆者がこの村で2005年に調査した時には，サクテンから婚入してきた女性が2人いた。そのうちの一人は，放牧のためにルブランからサクテン付近にやってきた男性と結婚し，8年間サクテンに住んでいたが，ブータンの国籍法で夫の国籍が認められなかったため[34]，ルブランに戻って住むことになったという。もう一人のケースは，叔母もサクテンから婚入してきていた。

国境地帯のブロクパとモンパは，日常的にもチーズやバターの売値の相場情報を交換しあっていて，より高く売れるほうへ出向いて売りさばくという。衣服が同じで，互いの言語をよく話せるため，容易に国境を往来できるが，万が一とがめられた時のために地元の役所で書類をもらって携行するという。これは，祭や法要の際に国境を越える場合も同様である。携帯電話が普及して情報交換がさらに活発になったとき，モンパの交易範囲はますます広がる可能性がある。ブロクパとモンパは，テッサ・モーリス＝鈴木が言う「共通の言語と歴史を共有する共同体を横切る象徴的国境の両側を往来して生きる人びと」［テッサ・モーリス＝鈴木 2000: 3］なのである[35]。しかし，ツーリズムの解禁によってこれまでの国境通過にかかわるゆるやかな規制が，より厳しいものに強化される可能性があることは否定できない。

ブロクパ男性の民族衣装

ブロクパ女性の民族衣装

3.5　民族衣装か国民服か

ブータンでは，1989年に第4代国王によって男性はゴ（*go*），女性は（*kira*）が国民服として定められ，学校，政府機関，寺院など公の場所での着用が義務づけられ，大多数のブータン人はそれに従ってゴ，キラを着用している。これらはもともとブータンの大多数の人々が日常的に着ているものだが，北のラヤに住む牧畜民ラヤッパや西南部のロプ（Lhops）[36] 南部のネパール系住民，そしてブロクパの衣装はまったく異なる。この布告が出されたのが南部のネパール系住民の帰属・難民問題[37] が起きた直後だったため，ネパール系住民からは反発が出た。しかし，ブロクパやラヤッパ，ロプなどの少数民族集団は「帰属意識に懸念がない」という理由でこの国民服の着用義務はない［山本 2001: 138］。

かつてのモン・ユル文化圏の歴史の反映か，ブロクパとモンパとはほぼ同じ衣服を民族衣装としている［脇田2009a］。「ほぼ」と書いたのは，生業や着用する年齢，地域などによる違いがあるからである。男性が着るチュバという赤いウールの上着，キュロットスカートのようなカンゴー，女性の臙脂色の貫頭衣シンカと上着のトゥドゥン，そして黒い腰当て布メーキムは，長さや色，素材，形状などいずれをとっても国民服のゴやキラとは異なるものである。中でもブロクパを象徴するのが，ヤクの毛をフェルト状にして房をたらしたベレー帽子のような帽子である。これは男女ともにかぶるものだが，頂上を平らにしているところがモンパとの違いである。底に皮を縫いつけた布製のロングブーツは，しだいに機能性，耐久性に優るゴム長靴に取って代わられつつある。

現在，通電工事が進められているが，電気とともに数年後にはテレビやインターネットがこの地域にもやってくるだろう。2008年には全く考えられなかった携帯電話が2010年には通じるのである。現在ブータンには，約40のケーブルチャンネルがあり，インドだけでなくNHKの国際放送を観ることもで

宗教劇アチェ・ラムの踊り手（メラ）

きる。テレビはブロクパにとっては大きな社会変化の起爆剤となることだろう。テレビはまず彼らの衣服に影響を与えるのではないだろうか。男性の着るチュバは大変暖かく，羽毛服のように火の粉で焼け焦げる心配もない。だが，女性のシンカやトゥドゥンは，ブラとよばれる野生絹で織られ，ラック・カイガラムシの分泌物ラック染料で染められているが，ブラもラック染料も高地にはなく，アッサムや東ブータンの低地で入手してきた。またブラを織る技術もラディなどの低地の村でシャルチョプから習い覚えたものである。

モンパの村でも，若者を中心に衣服のインド化，西洋化が進み，シンカやトゥドゥンは値段の高騰もあって，ハレ着としてしか着られなくなっている[38]。ブロクパの村にもテレビの影響で同様のことが起こる可能性は高い。この地域を選挙区とする国会議員のJ氏は，筆者のインタビューに対して，「学校ではブロクパの伝統的な民族衣装の着用を奨励するつもりだ」と言う。独自の伝統文化を守らせたいという意味での発言だが，それが地元の人びとの望むところかどうかという問題がある。すでにサクテンでは，ゴやキラを着る人びとが少しずつではあるが増えている。国民服を着たいという人びとに対して，ブロクパの民族衣装の着用を強要しないまでも奨励するということは，結果的にブロクパをエスニシティの狭い枠の中に押し込めてしまうことになる。2008年当時，メラの小学校では，高学年の生徒には週1回，ゴとキラを着て登校する日というのがあった。それは，卒業後，麓の町の学校に進学したときに彼らが困らないようにするための配慮だという。メラやサクテンの地においても，国民国家化は確実に進行している。

3.6　祭と民俗芸能

サクテン，メラの祭は主に仏教儀礼を伴うが，アマ・ジョモの奉献祭のように土着の信仰にもとづくものも多い。日付はブータン暦によってあらかじめ定められているが，天候などさまざまな理由でしばしば変更になる。これまでは，地元の人びとが，外部の目を意識せずに行ってきたものである。

芸能に関していえば，ヤクがどのようにブロクパにもたらされたかという伝説を舞踏化したヤク・チャムや宗教劇アチェ・ラムなどの仮面舞踏は，祭のときや外部からの客をもてなす祭のエンターテイ

メントとしてもしばしば演じられる。アチェ・ラムは，中央ブータンや東ブータンの麓の村でも演じられていたが，現在はまれである。かつて長い時には数日間におよんで演じられたという。観光局は，メラとサクテンの祭のリストを作成して，ツアーオペレーターに配布している。

アチェ・ラムもヤク・チャムも大変難解なストーリーで構成されていて，その全体を理解することは難しく，地元の語り手によっても内容に変化がある。観光局の連絡リストの中に，メラのアチェ・ラムを指導，主宰するR氏の名前があった。いずれは，ツーリスト向けの説明書ができて，R氏版が正統なものとして語り継がれてゆくであろうことは想像に難くない。そして，その影響は国境を越えたモンパの村にもおよぶ可能性がある。アチェ・ラムやヤク・チャムは西カメン県ではだいぶ衰退したが，タワン県では現在も盛んに演じられているものではあるが，場所により様々なヴァリエーションがある。しかし，ツーリスト用のダイジェスト版を演じる舞踏団もでき，それが主流になりつつあるからである。

4. 誰のためのツーリズムか

まだ最終的にはなっていないものの，観光局もこの地域の特殊性に合わせて，さまざまな制限を設ける予定があるようだ。他の地域のトレッキングでも行われている「ごみの持ち帰り」や，「薪の使用禁止」，「キャンプ地の指定」に加え，「人数制限」，「住民が村にいるシーズンに合わせたシーズン設定」，や「割増料金の徴収」などが予定されている。そして，住民が参加し，彼らに現金収入をもたらすコミュニティ・ベイスト・ツーリズムの導入を考えているという。まだ始まっているわけではないため，安易な批判は避けたいが，導入を前提に検討してみたい。

4.1　民族観光の問題点

いままで概観してきたように，メラ，サクテンの文化は，ブロクパの地域性や信仰にもとづくもので，外部からの「まなざし」［Urry 1990］にさらされる時には，外国人ツーリストだけでなく，他の地域の人びとから見ても「珍しく」，「異質なもの」と映ることが多い。こうした歌や踊りは政府によって作り出された大きなイベントで使われるようになっている。周縁の民が醸し出すエキゾティシズムこそが，観光化の資源になると考えられるようになっている。

外部からのまなざしは，イベントにおいて顕著に表れる。例えば，2009年12月に中央ブータンで農業省の主催で開催された「第1回牧畜民フェスティバル」を見学したが，各地の牧畜を生業とする人びとの情報交換，学び合いの場という本来の目的に反し，サクテンとラヤから参加していたのは若い男女の踊り子グループだけであった。歌や踊りを披露し，それを見物する地元の人びとは，自分たちとは異なる衣装を身に着けたブロクパやラヤッパのパフォーマンスを楽しんでいたが，踊り子たちは，牧畜従事者としてではなく，エンターティナーとして招じられていたにすぎない。イベントの当初の目的とはかけ離れた結果となっていた。

ドゥック航空の機内誌2009年10月号に「赤い上着とゴム長靴の土地」というタイトルのイギリスの旅行家ロビンソン＝スミス（Robinson–Smith）による紀行文が掲載されていた。メラのブロクパの慣習がいかに他のブータンの人びとと異なるかを書いているのだが，「押しつぶされた蜘蛛のような奇妙な帽子」，「一妻多夫婚」，「火葬の替わりに遺体を切り刻んで川に流す」，「赤いウールのコートを着て，山刀と布製のバッグを肩から掛けた男たち」という内容である。表現が的確かどうかは別にして，いずれもブロクパの慣習の要素を取り出して描いている。たしかに，現状を書いているという点では間違っ

てはいない。しかし，こうした「奇妙な」,「変わった」とされる人びとの表象は繰り返し語られ，いずれ固定化したブロクパのイメージになってゆくであろう。

もう一つはブロクパを「消えゆく民」として扱う視点である。*Some Last People* という写真集がある［Odier 2004］。副題には,「ブータン，中国，メキシコ，モンゴル，シベリアの消えゆくトライブ」と書かれている。ブータンの紹介と共に,「消えゆく人びと」としてサクテンのブロクパが取り上げられている写真集である。書かれている内容は，ツーリストの紀行文のようなものだが，文章を読んでもなぜ彼らが「消えゆく民」なのかまったく理解できない。読者向けの前言には「5つの民が完全に消えゆく前に，彼らの話を伝え，その生活を記録するのが自分の目的である」と書かれている。この写真集の著者は，ブロクパのような人びとは，いずれ近代化やグローバリズムに飲み込まれて消えてゆくと信じているようである。クリフォードのいう〈消滅の語り〉[39] によってノスタルジアをかき立てる内容である。

このように，ブロクパには，エンターテイメント―楽しませるもの，エキゾティシズム―変わったもの，バニシング―消滅するものという3つの表象が見られるのである。

他方，首都に住むブロクパの立場はどのようなものであろうか。首都にメラ出身者11家族60人で組織するM協会がある。商店やレストランのオーナー，仏画画家，フリーランスのツーリストガイド，トレッキングスタッフなどとその家族の集まりである。この組織のメンバーは故郷を離れている者たちが，冠婚葬祭などのために会費を積み立て助け合う互助会である。首都には500人を超えるブロクパが住んでいるといわれる[40] が，その数の把握は難しい。M協会のメンバーの集まりでは，全員がゴとキラを着ていて，他の地域の人びととの区別はまったくつかない。しかし，会に出席して話を聞くと，彼らは，ブロクパであることには誇りを持っているが，故郷の後進性と教育レベルの低さや他とは異なる風俗，習慣などから連想される「蔑視の視線」を恐れ，自分の出身地を進んでは言わないという。パロの国立博物館に展示されているブロクパの民族衣装が汚れて古いものであること，サクテンを舞台にして撮られたブータン映画[41] を通じて伝わっている「夜這い」の習慣から，ブロクパ女性が性に対して自由だというあやまったイメージをもつ人びとがいて，実際に売春に近い行為を求められたブロクパ女性がいたことなどについて怒りを交えて語っていた。ブロクパに対して,「貧しい」,「汚い」,「教育程度が低い」というイメージが一般のブータン人にあること，それがツーリズムによって強調され，再定義されることを恐れていることがうかがえる。国民国家に組み込まれることによってマイノリティであることが可視化され，それがツーリズムによって顕在化する状況が起こっている。

ブータン国民でありながら，ブロクパという少数集団に属し，歴史的，文化的には隣国インドのモンパとの紐帯がより強いというアイデンティティ複合[42] を意識するのは，外からの権力の介入によって，自分たちの民族集団の生活それ自体が他者によって資源化されるときであろう。生活それ自体を観光する，村の生活をそのまま見せるという「民族観光」（エスニック・ツーリズム）は世界中に多くの事例があるが，ツーリズムの導入が，現地の人びとに対する誤解を生みだし，誇張されたイメージを作り上げてしまうという例は多い。タイのエスニック・ツーリズムが「秘境の少数民族，山地民」イメージを作り上げてきた例［石井 2010: 295］もその一つである。では，観光局が提唱する地元住民主導の地元に利益が還元される「コミュニティ・ベイスト・ツーリズム」ならよいのであろうか。

4.2　コミュニティ・ベイスト・ツーリズムの可能性

コミュニティ・ベイスト・ツーリズムとは，前述の第10次5カ年計画でも具体的に提言されていたもので，「観光化による利益がツーリストを受け入れるコミュニティ全体に再配分されることを前提にしたツーリズム」［江口　2010: 21］と定義される。しかし，こうしたキャンペーンに乗って受益者となれるかどうかはツーリストを迎える地元にとって大きな関心事である。2008年に観光局の調査メンバーとメラで会った時にも，その問題が大きな焦点となった。それまで，ツーリズムにはまったく関心がなかったメラの村役人たちは，「ツーリストが来ることによって村に現金収入がもたらされる」，「ツーリストを意識して村人も村の環境美化に励むようになるだろう」などと聞かされたという。それに対し，筆者の案内役のメラの青年Kが異議を唱えた。Kは首都のツアーオペレーターでトレッキングの下働きをするアシスタントとして雇われ，トレッキングにも何度か同行した経験がある。しかし，その仕事は自分向きではないと妻子のいるメラへ帰ってきていた。Kはメラがツーリストに開放されることには否定的な立場であったため，調査メンバーはその意外性に驚き，数時間かけて筆者の宿泊先の民家でKと話し合いを持った。その内容は大変示唆に富んで興味あるものだった。

Kは，自分のコミュニティの構成員，ツアーを手配するツアーオペレーター，そしてツーリストの三者に対して彼なりの経験から失望感と警戒心を持っているようだった。たとえば，荷運び用の馬を貸し出してそこから利益を得るというアイデアに関しては，受益者は馬の所有者だけで，その所有者たちも自分の馬が使われないとすぐに文句を言いに来る，馬の質も考えなくてはならず，平等に仕事を与えるのは簡単ではないという。地元の人びとを使えといっても，首都のツアーオペレーターは，ツーリストからの苦情を恐れてガイド，コック，トレッキングスタッフに関しては自社で雇い入れた者を送ってくるのが普通である。コメなどの食材もすべて首都や麓の町や村で調達されるので，メラで供給できるのは若干の野菜とバター，チーズぐらいである。Kがトレッキングで訪れた北部の山岳地域もツーリストの来訪で現金収入があるのはほんのごく一部の人間だけで，コミュニティ全体が受益者となっている例はない，逆に先祖伝来の仏具や装飾品，家財道具などをツーリストに売る姿をなんども見た，メラでも筆者を案内していると知った村びとから筆者に仏具や牧畜に使う道具を売ってくれと相談を受けたと打ち明けていた。骨董品の持ち出しはツーリストには禁止されているし，大事な家財道具を売ったら二度と同じものは買えないからと説明して断ったという。ツーリストがやってきたら，メラのほとんどの家からめぼしい家宝は姿を消すだろうと断言していた。

ツーリストに対しても懐疑的であった。数年前に政府のゲストとしてやってきたインド人女性が，アマ・ジョモの山の入山規定を破ってタバコを吸ったために悪天候を引き起こしたこと，頂上が女人禁制であることを説明しても女性差別だという理由でなかなか納得しなかったことを例にあげ，「ツーリストに入山に関わるさまざまな禁忌を誰がどう説明して，どう聖域としての山を守らせるのか」と詰め寄っていた。「村の内外には，ヘビの神にまつわるルー信仰，アマ・ジョモの伝説の残る神聖な石や岩が多く点在し，そのすべてをツーリストの不敬な行動から守ることは不可能である，年に数人かの来客の案内をしているが，これ以上の数のツーリストは自分はいらない」と主張していた。Kの独自の経験，〈外の世界をみる〉ことによって，自らの土地を相対化して考える視点は，〈上からの〉ツーリズムに対しての強い懸念を含んでいるのである。

その話し合いから数日して，自分の選挙区の巡回のためにメラへやってきたJ氏と会って，観光化について質問した。当時のJ氏は観光化については，積極的ではなく慎重な態度であった。帰国後，筆者

が書き送ったKの主張には興味を示し，準備不足のまま安易な開放はしたくないとの返答を送ってきた。住民には選挙公約でインフラの整備を約束してあり，まずは道路，そして電気，携帯電話，小学校の上級クラスの設置などやるべきことが山積している，ツーリズムに関しては，地元の利益優先で検討したいとの考えを示していた。

実際には，観光局主導で進められているが，現時点で検討されているのは，数日ごとに人数を限定したツーリストグループの入域を許可し，地域住民がその主体となるコミュニティ・ベイスト・ツーリズムであるようだ[43]。メラの場合は，馬の手配やその他の連絡先として村長（ガップ）など三人の名前が挙げられ，携帯電話番号が書かれている。しかし，ガップなど村役人は通常の業務に常に忙殺されていて，ツーリストの世話をする暇などあるとは思えない。観光局が検討しているこの地域への入域に限った追加料金も，いくらが誰にどのように払われ，どう使われるのかが住民にもツーリスト，ツアーオペレーターにも明確に示される必要があるだろう。

他方，首都に住むメラ出身のブロクパたちにも意見を聞いてみた。Kと同意見が大半を占めたが，中には，自分の家族が馬を持っているという理由で，ツーリストに期待する人もいた。故郷を離れた人びとが案ずるのは，現地のコミュニティが一枚岩ではないという現状である。2008年の初の民主化選挙のうち下院に当たる国民議会選挙は，DPT（Druk Phuensum Tsogpa）とPDO（People's Democratic Party）の二党によって争われたが，結果はDPTが47の議席のうち45席を獲得するという地滑り勝利をおさめた。サクテンの投票率は77%，メラは62%で，この地域でもDPTが勝利した。メラではPDPのD氏の得票率が36.4%，J氏は63.6%という結果だった[44]が，この選挙は村を二分する争いになり，その後J氏が2人の支援者代表に仲直りの仲裁をして収まったとも伝えられていたが，実際にはまだ相互のわだかまりは完全には消えていないという。

この村の分裂状態が噂の通りであるとすれば，コミュニティ・ベイスト・ツーリズムは，村内に新たな問題を生む可能性も秘めている。　また，ツーリストが通過する麓の村が馬の供給者になるとブロクパは受益者となれないが，麓の村にも言い分はあるだろう。コミュニティの範囲をツーリストが出発する麓の村まで含むかどうかによっては，麓の村との対立なども懸念される。他にも，不安材料はある。たとえば，薪の使用禁止，ゴミの持ち帰りなどのトレッキングに関わる一般的なルールを地元の人びとがいかに守れるかということである。地元民は薪を燃料として使用しているが，ツーリストはプロパンガスなどの燃料を持参しなければならない。このようなエコ・ツーリズム[45]のやり方は，地元の人びとに理解されているとは言いがたく，薪を売って現金を手に入れようとする人がいても不思議はない。問題が予想されるコミュニティ・ベイスト・ツーリズムだがそれを村の担当者が公平な立場で管理，運営できるかという問題もある。西ブータンの住民参加型の小規模開発事業についての真崎の報告は，個人主義の横行や新たな権限を与えられた区長の汚職，村落代表者の負担の偏在などいくつかの問題を指摘している［真崎 2009: 61–63］。ツーリズムの導入を地元に勧めた観光局には，こうした問題に対しても責任が求められている。

十分な議論や準備がないままでの観光開発には，ネパールの旧ムスタン王国にその失敗例がある。ムスタンの場合は，1992年にツーリズムが解禁されたが，初年度年間年間200人に限定されていた訪問者数が，旅行業者からの要望で2ヵ月経たないうちに400人になり，6ヶ月後には1000人に増加された。その結果，最初の8ヶ月で価値ある文化財が大量に密売されてしまったという。政府が約束していた地元への還元金も予定通りには払われなかったという［Gurung 2000］。その原因は，グルン（Gurung）

の論文のタイトルでもあるToo Much Too Fastである。

5. おわりに

『貧困の超克とツーリズム』［江口・藤巻 2010］の中で，江口はコミュニティ・ベイスト・ツーリズムを「貧しい人びとに利益をもたらすツーリズム」という意味のプロ・プアー・ツーリズム[46]のひとつだとしている［江口・藤巻2010: 24］。収められた論考には，日本だけでなく，世界各地で試みられているさまざまなツーリズムの例が挙げられているが，貧困の克服にツーリズムが果たせる役割はあるものの，その実現が難しいことが汲み取れる。本書のタイトルが『貧困の超克のための・・』ではなく，『貧困の超克と・・』となっているのは，そのことを表しているのではないだろうか。

しかし，本稿で示したメラ，サクテンの事例では，貧困やさまざまな問題の解決の手段としてツーリズムが考えられたのではなく，どちらかといえばまず先にツーリズムがあった。国家の開発計画の一端として東ブータンを開発することが決まり，そのためには国内航空網を拡充したいが，ツーリストにアピールできる文化資源に乏しい東ブータンにはもっとインパクトのある観光スポットが必要である。その点，長い間禁断の地であったサクテン，メラなら新規のツーリストだけでなく，リピーターも期待できる。ブロクパの生活文化そのものが観光資源として使えると判断された。ただし，これはあくまでも中央の知識人の一方的な考え方であり，地元にはこれをただ受け入れるだけでなく，これに対抗して，あるいは逆手にとって，さまざまな交渉を試みる〈エージェンシー〉（agency）としてのいわゆる民族エリートの姿が今のところ見えない。

ブータンのツーリズムは，これまでグローバリゼーションの影響を受けながらもそれを巧みに利用しながら独自の歩調を国際社会に示してきた。しかし，ツーリストの数を増やすという数量だけを指標とする政策によって，現在大きな転換期を迎えている。ブータンのツーリズムは，本来，哲学や思想に裏付けられ，「持続可能な」質を重視するものであったはずである。今後のツーリズムの量的増大によって，本当の豊かさとは何かを世界に対して示してきたブータンの主張が，大転換する可能性もある。ブータンは，大きなグローバリゼーションの動きの中に巻き込まれつつある。グローバリゼーションの定義は様々で，「時間―空間の圧縮」［Harvey 1989: 240］，「世界の縮小と，一つの全体としての世界という意識の強化」［Robertson 1992: 8］，「ある場所の出来事が，はるか遠く離れたところで起きた事件によって方向づけられたり，逆に，ある場所で起きた事件がはるか遠く離れたところの出来事を方向づけていくというかたちで，遠く隔たった地域を相互に結びつけてゆく，そうした世界規模の社会関係の強化」［Giddens 1990: 64］などである。しかし，この定義で注目したいのは，アパドゥライの「グローバル化それ自体が，深層では歴史的で不均等な〈ローカル化〉のプロセスでさえある」［Appadurai 1996: 17］という指摘やギデンズが「グローバリゼーションが，世界中のローカルな文化的アイデンティティティ復興の背景にある」［Giddens 1999: 13］と述べている点である。「さまざまな小社会を国民国家およびグローバル・システムに編入する過程は，結局のところ，全面的な消滅も全面的な同化も産み出すことはなかった。むしろ『近代性』としてごく一般的に知られている歴史現象の独特な経験を産み出した」というテッサ・モーリス＝鈴木の言葉も同じことを意味していると考える。それは，彼女の言う，中央から「奥地」ではなく，「奥地」から中央を目指す「辺境から眺める」視座［テッサ・モーリス＝鈴木 2000: 22–23］によって明らかにできるであろう。東ブータンのツーリズムをめぐっては，国民国家を，ひいてはグローバリゼーションを相対化する〈まなざし〉を地元の多様な視点から再構築

することが要請されているのである。

グローバルなつながりやネットワークを持った首都に暮らすブロクパや，国境を往還する人びとによって，いずれ，メラ，サクテンに「地元民の視点」に立った「国家からも市場からも独立した〈草の根のグローバリゼーション〉」［アパドゥライ 2010: 186］が，芽生える可能性もある。東ブータンのツーリズム開発を通して，グローバリゼーションが，〈瓦解しやすい社会達成としてのローカリティ〉[47] をどう構築，達成してゆくのかという世界の大きな変動を相対化する視点が見えてくる可能性もあるが，それにはさらに奥地での継続的な観察が必要である。

注

1) 同年6月2日に第4代国王ジグメ・センゲ・ワンチュック（1955–）の戴冠式が行われたが，その当時の様子を伝えたナショナルジオグラフィックは，国全体を貫く道路が舗装されていないため，東ブータンの多くの住民がいったんインドのアッサム州に南下し，西側の国境から再び北上して首都ティンプーに集結したことを伝えている［National Geographic 1974年10月号561頁］。
2) ［Tourism Council of Bhutan 2009: 17］の表を参照。
3) 2009年5月27日付クエンセル・オンライン。クエンセル（Kuensel）はブータンで最も古い新聞で，2001年4月18日からオンライン版が導入された。http://www.kuenselonline.com
4) 1974年以来，たびたび名称が変わっているが，混乱をさけるため，本稿ではブータン政府観光局という意味で，特別な場合以外は，「観光局］と統一する。
5) 2009年11月にティンプーの政府観光局（Tourism Council of Bhutanに改編されている）でマーケッティング・プロモーション責任者に直接取材した。
6) ［Department of Tourism 2005: 86］。
7) 外国人ツーリストの旅行手配をするブータン人経営の旅行会社。ライセンス取得が容易なため，2009年12月までに622社が登録されているが，2009年に旅行の取り扱いがあったのは，267社だけである［TCB 2010: 45］。
8) ［森山 2007: 87］。
9) ［Sonam Wangmo 1990］，［Chand 2004］，［Ashi Dorji Wangmo Wangchuck 2006］などがある。
10) 山下はこの二分法による単純化をバリの例で批判している［山下 1999:170-171］.
11) ブータンに関する日本の出版物の中に，「“余りもの”で観光事業を始めました」という項目がある［アスペクトブータン取材班 2009: 68-69］。そこには，戴冠式のために購入した車や迎賓館の使い道がないので，観光客を受け入れることを思いついたと書かれている。しかし，これは事実に反している。
12) 当時の円換算レートは200円台後半から300円であったので，かなり高額である。一般に「ヒッピーを呼び込まないために高くした」と言われるのは，高いのでバックパッカーは行きにくいという結果論であって，ブータン政府がはじめから意図していたことではない。インドやネパールのようにチップを受け取る習慣がなかったブータンでは，この130ドルさえ払えばかつての迎賓館に泊れて，車もガイドも入場料もマスクダンスのショーもすべて含まれていたので，決して高くないという評価もある。
13) インナーライン（内郭線，内部国境線）は，イギリス植民地政府がアッサムでの茶園経営に乗り出した頃，当時「野蛮な種族」とされていた周辺の山岳民を統治することの困難さからアッサムの平地民と山岳民を隔てるために1873年に引いたもの［ゲイト 1945: 408–409］。
14) たとえばNational Geographicの記事。［Scofield 1974: 570–571］。
15) 2010年6月7日付けクエンセル・オンラインによれば，これに加え12軒が建設中で，パロはホテルが多すぎて中には赤字で将来倒産しかねないところもあるという。
16) ブータンシボリアゲハで学名は，*Bhutanitis ludlowi*。
17) 1991年3月23日付けクエンセル紙12頁。
18) 4代国王による造語であるが，幸福について語る概念ではなく，ブータンが目指す，開発や進歩が志向する変化への指針とされる［キンレイ，2005: 14–17］。
19) 2008年1月24日にそれまでの計画委員会（Planning Commission）が，GNH委員会（Gross National Happiness

Commission）に改称された。

20) 2000年に創立されたブータンの旅行業者の団体。観光局とのパイプ役でもある。

21) 憲法第5条「環境」第3項。

22) 筆者が取材した現地のオペレーターのうち，二社が自由化に積極的であったが，彼らに共通しているのは自社のホテルを各地に持っている，あるいは自由化になればホテルを建てる資本力があることである。これに対しては，中小のオペレーターには勝ち目はなく，同じ料金でサービスの質で戦ってきた業界のこれまでの努力を無視した考えだと猛反発する意見が多数派を占めた。「質を守るために三ツ星以上のホテルを使え」といっても，地方に行ったらそんなレベルのホテルはない。星を決めるのが誰か，何が基準になるのかも説明がないという不満もあった。

23) 2009年6月23日付クエンセル・オンラインによれば，15才以上の失業率は，2003年の1.8％から2007年は3.7％に増加している。

24) 直接首相に取材した山村の報告にも，同じく雇用の創出についての強い期待が反映されている。［山村2008: 18］。

25) ブータン南部，インドとの国境に広がるマナス国立公園のこと。

26) ［Driem 2001: 871］。

27) 「パ」はブータンでは集団名や地名の後につけてそこに属す人びとを示す接尾辞であるが，ゾンカ語では，地名の後の「パ」は「プ」というふうに短く発音される。［Pommaret 1997: 59］。シャルチョッパはシャルチョップとなるが，サクテンやメラの人びとの呼称の語尾は「パ」のままである。

28) 4代国王王妃は，ブロクパがツォナから逃れた時期については7世紀という説と15世紀か16世紀とする2説あるとしている［Ashi Dorji Wangmo Wangchuck 2006: 166］。

29) ツォナからやってきたブロクパが，現在の門巴族とどのような関係にあるのかは，チベット文献や言語調査などにより総合的に研究される必要がある。

30) タシガン県のホームページDzongkhag Administration, Trashigang（http://www.trashigang.gov.bt/profile.php）2010年7月9日付による。

31) 2008年に制定された新憲法第3条には，「国王は，ブータンのすべての宗教の守護者である」と明記されている。しかし，ドゥックパ・カギュー派とは明言されていないものの，その最高権威であるジェー・ケンポ大僧正が率いるブータン中央僧団（Zhung Dratshang）が，国の財政的援助のもとにあることからもドゥックパ・カギュー派がブータンの国家的な宗教であることは変わらない。

32) 1959年3月チベットを脱出したダライ・ラマ14世は，中印国境を越え，タワンから西カメンを経てインドに亡命した。それ以来何度かタワンを訪れている［脇田 2009b］。

33) その生涯については，［Aris 1989］に詳しく述べられている。

34) 1985年の国籍法。

35) モンパの言語は地域によって大きな差がある。ブロクパ語は，ルブランやマゴウなどのモンパの言語である。

36) サムツェ県に住む，自称はゾンカ語で「南の人」を意味するロプ（Lhips）。ネパール語ではドヤ（Doyas）とよばれている。ブータンの先住民のひとつと考えられている［Pomarret 1997: 55］。

37) ネパール難民問題は現在も未解決である。詳しくは，［今枝1994: 122–137］，［Hutt 2003］などを参照のこと。

38) モンパ，ブロクパの民族衣装については，［脇田 2009a］を参照。

39) ［Clifford 1988: 17］。

40) ［平山 2005: 31］。

41) 2004年制作のLhadha-gau。

42) アイデンティティ複合については［板垣 1980］を参照。

43) 観光局が仮に提案しているモデルコースは，タシガンから車で麓の村へ行き，徒歩でメラからサクテンを回り再びタシガンへ戻る6日間のトレッキングコースとなっている。これは毎日移動するコースになっているので，ツーリストの希望によって数日間を村で過ごし，祭の日程に合わせてコースを組み立てることもは可能である。

44) 選挙結果の数字については［Sithey & Dorji: 2009］による。

45) エコ・ツーリズムが先進国中心主義的であり，エコ・ツーリズムも観光の一形態に過ぎず，西洋の文脈で創出されたエコ・ツーリズム開発なるものを成功させるためには，その開発現場に「エコ・ツーリズム文化」が創

出されることが不可欠であるという橋本の主張［橋本 2003: 62–68］は正しく，その点ではメラ，サクテンはまだ準備ができているとは思えない。

46) プロ・プアー・ツーリズム（Pro-Pour Torrism）という言葉について，日本で初めてこのツーリズムを紹介した高寺奎一郎は，「この言葉には定義はないが，貧しい人びとへの利益をツーリズムにより増大させる仕組みや手法である」と説明している［高寺 2004: 123］。

47) ［Appadurai 1996: 179］。

引用文献

Appadurai, Arjun, 1996 (2004), *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalozation*. University of Minesota Press.（『さまよえる近代―グローバル化の文化研究』門田健一訳，平凡社）。

アパデュライ，アルジュン，2010，『グローバリゼーションと暴力―マイノリティーの恐怖』藤倉達郎訳，世界思想社。

Aris, Michael, 1989, *Hidden Treasures and Secret Lives: A Study of Pemalingpa (1450–1521) and the Sixth Dalai Lama (1683–1706)*. London: Kagan Paul International Limited.

Ashi Dorji Wangmo Wangchuck, 2006, *A Portrait of Bhutan: Treasures of the Thunder Dragon*. New Delhi: Viking.

アスペクトブータン取材班，2009，『幸福王国ブータンの智恵』アスペクト。

Brunet, Sandra etc. (eds.), 2001, Tourism Development in Bhutan: Tensions between Tradition and Modernity. In *Journal of Sustainable Tourism*, 9(3): 243–263.

Chand, Raghubir, 2004, *Brokpas: The Hidden Highlanders of Bhutan*. Nainital: PAHAR.

Clifford, James, 1988 (2003), *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge, MA: Harvard University Press.（『文化の窮状―二十世紀の民族誌，文学，芸術』太田好信他訳，人文書院）。

Coelho, V.H., 1970, *Sikkim and Bhutan*. New Delhi: Indian Council for Cultural Relations.

Department of Tourism (DoT), 2005, *Sustainable Tourism Development Strategy Bhutan*. Royal Government of Bhutan.

Dorji, Tandi, 2001, Sustainability of Tourism in Bhutan. In *Journal of Bhutan Studies*. 3(1): 84–107.

Driem, George van, 2001, *Language of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region*. Leiden/Boston/Köln: Brill.

江口信清，2010，「社会的弱者と観光に関する研究」『貧困の克服とツーリズム』江口信清，後藤正己（編著），pp. 9–40，明石書店。

江口信清・藤巻正己（編著），2010，『貧困の超克とツーリズム』明石書店。

ゲイト，エドワード，1945，『アッサム史』民族学研究調査部訳，三省堂。Edward Gait (1905) 1967. A History of Assam. Reprint Calcutta: Thacker Spink & Co.

Giddens, Anthony, 1990 (1993), *The Consequences of Modernity*. Stanford: Stanford University Press.（『近代とはいかなる時代か？―モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳，而立書房）。

Giddens, Anthony, 1999 (2001), *Runaway World: How Globalization is Reshaping our Lives*. New York: Routledge. (Reprint 2009).（『暴走する世界―グローバリゼーションは何をどう変えるのか』佐和隆光訳，ダイヤモンド社）。

Gross National Happiness Commission, 2009, *Tenth Five Year Plan 2008–2013, Vol. 1: Main Document*. Royal Government of Bhutan.

Godde, P.M. etc., 2000, Tourism and Development in Mountain Region: Moving Forward into the New Millennium. In *Tourism and Development in Mountain Regions*. Pemala M. Godde etc. (eds.), pp. 1–25. Cabi Publishing: New York.

Gurung, C.P. & Maureen A. DeCoursey, 2000, Too Much Too Fast: Lessons from Nepal's Lost Kingdom of Mustang. In *Tourism and Development in Mountain Regions*. Pemala M. Godde etc. (eds.), pp. 239–254. Cabi Publishing: New York.

Harvey, David, 1989 (1999), *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*. Oxford: Basil Blackwell.（『ポストモダニティの条件』吉原直樹監訳，青木書店）。

橋本和也，2003，『観光開発と文化―南からの問いかけ』橋本和也・佐藤幸男（編），pp. 54–82，世界思想社。
平山修一，2005，『現代ブータンを知るための60章』明石書店。
Hutt, Michael, 2003, *Unbecoming Citizens: Culture, Nationhood, and the Flight of Refugees from Bhutan*. New Delhi: Oxford University Press.
今枝由郎，1994，『ブータン―変貌するヒマラヤの仏教王国』大東出版社。
石井香世子，2010，「国際観光システムを底辺で支えるはざまの人びと―タイ山岳少数民族と観光産業」『貧困の超克とツーリズム』江口信清，藤巻正己（編著），pp. 291–323，明石書店。
板垣雄三，1980，「アジア」『東京大学教養学科紀要』13: 24–30。
キンレイ，ドルジ，2005，「国民総幸福」『国際文化会館会報』16(2), 14–33。福田典子訳，国際文化会館。
真崎克彦，2009，「筋書きを超えて『持続する』開発事業―ネパールとブータンの参加型ガバナンスの批判的考察」『東南アジア・南アジア　開発の人類学』みんぱく実践人類学シリーズ6，信田敏宏，真崎克彦（編著），pp. 32–70，明石書店。
森山　工，2007，「文化資源　使用法」『資源化する文化』山下晋司（編），pp. 61–91，弘文堂。
Odier, Pierre, 2004, *Some Last People: Vanishing Tribes of Bhutan, China, Mexico, Mongolia and Siberia*. California: L'image Odier Publishing Company.
ピーティ，ディビッド，2009，「ブータンにおけるツーリズム」『グローバル化とアジアの観光』藤巻正巳，江口信清（編著），pp. 182–195，ナカニシヤ出版。
Pommaret, Françoise, 1997, Ethnic Mosaic: Peoples of Bhutan. In *Bhutan: Mountain Fortress of the Gods*. Christia Schicklgruber & Fran?oise Pommaret (eds.), pp. 43–59. New Delhi: Bookwise.
ロバートソン，ローランド，1997，『グローバリゼーション―地球文化の社会理論』阿部美哉訳，東京大学出版会。
Robertson, Roland, 1992 (1997), *Globalization: Social Theory and Global Culture*. London: SAGE Publications.（『グローバリゼーション―地球文化の社会理論』阿部美哉訳，東京大学出版会。
Robinson-Smith, Tony, 2009, A Land of Red Coats and Rubber Boots. In *Tashi Delek: The In-Flight Magazzine of Druk Air*. 16(4): 80–86, New Delhi: Durga Das Publications.
Sarkar, Niranjan, 1981, *Tawang Monastery*. Shillong: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh.
Scofield, John, 1974, Bhutan Crowns A New Dragon King. In *National Geographic*, 146(4): 546–571.
Sithey, Gyambo and Tandi Dorji (eds.), 2009, *Drukyul Decides: In the minds of Bhutan's first voters*. Thimphu: Center for Research Initiative.
Sonam Wangmo, 1990, The Brokpas: A Semi-nomadic People in Eastern Bhutan. In *Himalayan Environment and Culture*. Rustamji, Nari K. and Charles Ramble (eds.) pp. 141–158. Shimla: Indian Institute of Advanced Study/ New Delhi: Indus Publishing Company.
高寺奎一郎，2004，『貧困克服のためのツーリズム―Pro-Poor Tourism』古今書院。
テッサ・モーリス＝鈴木，2000，『辺境から眺める―アイヌが経験する近代』大川正彦訳　みすず書房。
Tourism Council of Bhutan (TCB), 2010, *Annual Report Bhutan Tourism Monitor 2009*. Thimphu: IT and Research Section.
上田晶子，2006，『ブータンに見る開発の概念―若者たちにとっての近代化と伝統文化』明石書店。
Urry, John, 1990(1995), *The Tourist Gaze: Leisure and travel in Contemporary Societies*. London: SAGE Publications.（『観光のまなざし―現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳，法政大学出版局）。
山本けいこ，2001，『ブータン―雲龍王国への扉』明石書店。
山村高淑，2008，「ブータンに学ぶ観光開発の哲学―GNHとツーリズムの関係性についての一考察」『観光文化』188: 18–21，日本交通公社。
山下晋司，1999，『バリ　観光人類学のレッスン』東京大学出版会。
脇田道子，2009a，「表象としての民族衣装―インド，アルナーチャル・プラデーシュのモンパの事例から」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』68, pp. 35–58。
脇田道子，2009b，「2人のダライ・ラマとタワン」『チベット文化研究会報』33-4, pp. 15–19。